

論文内容の要旨

専攻名	経営意思決定 専攻	氏名	松島大輔
題名	新興国市場展開によるイノベーション ～日系中小企業の新興アジア展開を契機としたイノベーションの考察～		
<p>論文内容の要旨 (2,000 文字)</p> <p>本研究は、近年観察される日系中小企業やスタートアップスにおける、新興アジアへの海外展開を通じたイノベーションという現象に着目する。本研究では、この「先進国企業が新興国市場への海外展開を介してイノベーションの契機を掴む」という現象を、「越境型イノベーション」と定義する。そのうえでリサーチクエスションとして「先進国企業が新興国市場への海外展開を介した越境型イノベーション生成の契機を掴むための結合因果条件は何か」を設定する。さらに、そのサブクエスションとして「なぜ日系中小企業は新興アジアに進出して越境型イノベーションを興すのか」を設定、越境型イノベーションの理由（動機・背景・メカニズム）を解明する。</p> <p>本研究は以下の構成に従って展開する。</p> <p>第1章から第4章は本研究の前提である。第2章はボーングローバル企業論を中心とした越境型イノベーションに関する先行研究・学説を整理する。第3章では本研究の方法論を提示し、第4章は日本と新興アジア双方の、現状を分析する【研究の前提】。</p> <p>この前提を受け第5章では、越境型イノベーションの結合因果条件として、3つの事例から仮説を構築し、この仮説について、50事例を活用し質的比較分析法(QCA)の手法を用いて、越境型イノベーションの生成の契機となる結合因果条件を検証する【リサーチクエスションの解明】。第6章では、越境型イノベーションのメカニズムを考察する【サブ・リサーチクエスションの解明】。第7章では本研究の論理的帰結をまとめる【結論】。</p> <p>第8章では、本研究の成果を実現するため、日系中小企業が越境型イノベーション生成の契機を掴むための戦略と、政府に向けた政策提言を行う【政策提言】。</p>			

氏名	松島大輔
<p>本研究は、越境型イノベーション生成の契機となる因果条件として、国内での強固な規制制度や固定的な取引関係を前提とした「新天地効果」、課題発見、課題解決のための新結合、持続可能モデルの設定という「国際的企業家精神」、相互学習による「イナクトメント型支援」と「弱い紐帯の強さ」を前提としたネットワーク上の位相である「能動的支援機能」、の3つの条件を抽出した。そのうえで「能動的支援と新天地効果」または「能動的支援と国際的企業家精神」の結合因果条件が、越境型イノベーション生成の契機を掴むことを、質的比較分析法（QCA）を用いて検証した。つまり越境型イノベーション生成の契機を掴む条件は、企業行動と外部環境に依存し、企業資源論に基づく「潤沢な資金」や「海外経験のある人材」は必ずしも貢献しないことを明らかにした。</p> <p>日本国内のイノベーションは、クリステンセンのいう現在の軌道に基づいた「持続的イノベーション」であり、技術の高度化に傾注するほど、パラダイムシフトを伴う真の「破壊的イノベーション」から乖離する可能性がある。むしろ制度等の「隙間」がある不完全な市場、未成熟な新興アジアで、「ジョブ理論」に基づいて顧客の用事を満たし「破壊的イノベーション」を導く、顧客志向、マーケット・インのアプローチが必要である。</p> <p>従来イノベーション論は、先進国における学習効果がイノベーション競争力の源泉であると主張する。これに対し本研究が提示したのは、いずれの成熟化した経済においても、過剰な学習は、イノベーション生成の契機を掴むためには逆効果をもたらす可能性である。イノベーションのための新興アジアへの海外展開が一つの学習棄却方法となる。学ぶことよりも忘却に重きをおくことで、逆に新興アジアにおいて新たな市場主導の「破壊的イノベーション」に着手できる。</p> <p>新興アジアは、大震災と大洪水によって2011年を境に産業構造の大転換を遂げた。新興アジアこそ、日系中小企業が、従来下請関係から脱して自らのコア・コンピテンスを「再発見」し、新たな顧客を創造し、再結合としての新結合を目指すことができる。新興アジアは、日系中小企業にとって、系列型下請関係の解体による企業間関係の「内部化」から、「外部化」という「オープンイノベーション」と相俟って、越境型イノベーション生成の契機を提供することができる。</p> <p>これまで日系中小企業は、系列型下請構造としての中間組織のもと下請に甘んじてきた。しかし今後日系中小企業は、その軛を脱し、「系列からの自由」と「仕事・顧客を失う自由」という2重の意味で自由化する。新興アジアの課題解決やニーズ充足を目指す越境型イノベーションを通じ、「破壊的イノベーション」を目指すための新興アジアへの展開の新潮流である。</p> <p>今後日系中小企業が新興アジアでリスタートアップス（第二創業）を目指すため、能動的支援を活かし「持続的イノベーション」と「破壊的イノベーション」を「両利き」の経営で活用する企業のカーブアウト戦略としての「軒先ベンチャー」を提唱した。合わせて「人材ブロックチェーン」や「海外戦略投資庁」等の様々な政策提言を行った。</p>	